

JIA news kinki

翔

syo

no.094/2005

夏号





表紙写真：第一合同銀行本店営業室回廊部
(撮影：上田恭嗣)

表紙解説 - 第一合同銀行本店 回廊まわり

営業室の回廊・壁・柱・天井等にアール・デコ様式がふんだんに用いられていることが判る。薬師寺主計が、パリで開催されたアール・デコ博の建築デザインを、どのようにして早期から入手できたのか詳細は解明できていない。しかし、薬師寺は渡欧時に、パリにおけるインテリア関係の店舗等を掌握しており、建築意匠に用いるため輸入もしていた。

CONTENTS

連載

「西国巡礼古道を歩く」	生駒義範	3
「デザイントーク」	小島 孜	5
「住宅部会通信2005」	豊辺弘也	9
「建築家の視点」	市居 博	10
「都市点描」	富安秀雄	11

情報

新入会員紹介	12
リレーエッセイ	
「編集後記」	13

地方に生きたアール・デコの建築家 - 薬師寺主計

その4 回廊まわりのデザイン

当時から銀行建築の営業室には、二階部吹き抜けの空間構成がよく見られている。採光と換気のため高窓が設置され、これらの開閉・維持管理のため幅半間程度の狭い回廊が設置されていた。第一合同銀行本店（中国銀行旧本店）の回廊の下部には、特徴あるアール・デコ様式のデザインが見られる。漆喰による饅仕上げで、三角形を基本とした繰り返しのパターンではあるが、布地のドレープのようにも思える仕上げが施されている。また、回廊の木製手摺りには、丸鋸状にデザインされた鋼製の補強柱が外側に取り付けられていた。そして、回廊まわりの窓枠周辺の壁仕上げには、漆喰による饅仕上げで小さな凹凸のある三角形が連続し、左右対称で緩やかな稲妻形状に連ねられ、アール・デコ様式の特徴でもある幾何学模様がフルに用いられている。

この三角形を基本としたノギリ状の模様と回廊のドレープ状の模様等は、1920年代末から30年代にかけてニューヨーク・マンハッタンの摩天楼建築群に表現されたアメリカン・アール・デコ様式によく見られている。薬師寺主計はアメリカで用いられたこのようなアール・デコのデザインを、既に第一合同銀行本店で表現していた。回廊のドレープ状のデザインは、1925年に開催されたアール・デコ博のボン・マルシェ百貨店によるボモージュ館の建物頂部を縁取るデザインと同じ形状である。薬師寺による第一合同銀行本店の設計完了時期は、この万国博覧会の開会前後であり、営業室の室内意匠を表現した断面図には、このドレープ状のデザイン等も描かれていた。いずれにしても、アール・デコ博によってアール・デコ様式が世界に広まる前に、薬師寺はアール・デコ様式に注目し斬新な意匠設計を行っていた。



ボモージュ館・L.H. ボワロー設計

<参考文献> 上田恭嗣「アール・デコの建築家薬師寺主計」山陽新聞社2003
(ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授 上田恭嗣)

西国巡礼 古道を歩く

連載 第6回

世界遺産 熊野古道

生駒範義
(不二設計)



昨年の7月、和歌山県・奈良県・三重県にまたがる世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」が登録されたことは皆様もTVや雑誌でご存知と思いますが、ここで少し熊野霊場歩きの紹介をするのと同時にわたしの感じたこととお話します。古くは紀伊山地には「吉野・大峰」「熊野三山」「高野山」の三つの山岳霊場とそこに至る参詣道が生まれ、神々が宿る地域として神秘的であり、また難行苦行での修験道をすることにより聖地へと全国からたくさんの人々が訪れました。宗教・文化・交流と大きな影響を及ぼし、自然と人間の営みが文化を生み、信仰が育てた山々の風景こそが世界遺産の対象となっています。和歌山は海岸沿いの美しい景色と奥深い自然の山々に恵まれた地形で知られている。そして蟻の古道熊野詣にはたくさんの哀歓があり山河を踏み越えて聖地「熊野」に向かったといわれる。その中で今日お話しする場所は熊野三山の一の鳥居のあったところ、熊野霊場の門に当たる藤白(代)神社と中辺路を神坂次郎氏の小説「熊野路をゆく」を参考にしながら紹介します。

藤白(代)神社とは中世、熊野御幸の盛んなころは藤白(代)王子と呼ばれ、くまの街道に点々とする熊野九十九王子のなかでも格別の「五体



出展：和歌山県資料より転載

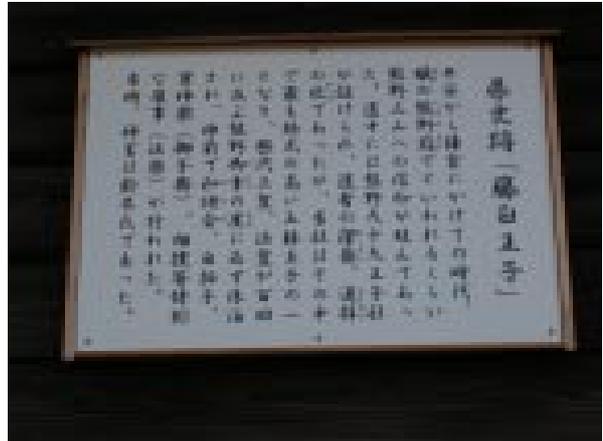
王子」(王子とは熊野権現の末社の意)として崇敬され格式も高かった。境内には高さ三メートルほどの自然石の辻書があり熊野一之鳥居自是熊野街道と記されている。

偶然とはいえ皮肉にも、その藤白(代)神社の裏手は、古道とは似ても似つかない白浜方面へ、また大阪方面へと向かえる高速道路の入口(鳥居)である。

その境内をぬけると平処(地藏さん)が見える。そこは藤白(代)坂であり、都に護送されていく有間皇子が、坂をくだってきたこの地で絞殺され、十九歳の薄幸な生涯をとじたという絶



藤白(代)神社境内にある道案内図



藤白(代)神社境内

西国巡礼古道を歩く



格式の高い藤白(代)神社



不寝王子からすこし歩くと
中辺路の山影がよくみえる



針地蔵の近くの小路JIAのメンバー

唱を刻んだ歌碑がある。その右手に、ひっそりと肩を寄せ合うような数個の石仏が並んでいる。それが有間皇子の墓だという。

有間皇子は孝徳天皇の唯一の皇子で、王位継承の有力候補であった。父の死後、天智天皇に対する警戒から狂気を振舞い、牟婁の湯(白浜温泉)におもむき静養する。都に帰り斉明天皇に、「彼ノ地ヲ観ルニ、病、オノズカラノゾコ消リヌ」その有間のことばに、南海へのあこがれを掻きたてられた斉明天皇は、牟婁への旅を思い立つ・・・というのが、この悲劇の幕開けであった。

一度は足をはこんでほしい。

先日(11月14日)和歌山から田辺へと、そして富田川沿いに国鉄バスに揺られ中辺路にはいった。本来なら紀伊路を通り田辺へとはいっていくのだが、今は高速道路が走り、和歌山から田辺までは約一時間半程度で到達する。

海沿いに位置する紀伊路はそれほど難行苦行というほどの行程ではなく、むしろハイキング気分であつて海を眺めながら歩けるコースといえる。

中辺路コースは熊野本宮への入口で古道の中でも幽暗を漂わせているコースといえます。富田川沿いに国道三百十一号線が走っており、かつてこの路は、藤原氏の陰謀で皇位を追われた花山法皇が・・・、世をすて妻子をすてて漂泊のたびに出た北面の武士、西行が・・・、恋をした人妻、袈裟御膳をわが手にかけて殺した文覚上人が・・・、敗残の平維盛が・・・、そしてまた照手姫が、病みくずれた夫の小栗判官を土車にのせて曳いていった純愛の小栗街道でもあり、いずれも傷ついた心を抱いて、ひと足ひと足踏みしめいった道である。そしてまた、いとしい安珍に裏切られ清姫が錯乱して、道成寺まで六十キロの道を、ひた走りに駆けていった狂恋の清姫街道でもある。雨が降ると霊が降り、餓鬼がつくときく。

最近では観光客も多く、他府県の観光バスが国

道三百十一号線を行き来して、古き面影が影を潜めた感があると思うのはわたしだけだろうか。国鉄バスで滝尻に下車する。滝尻とは富田川と石船川の合流する地点であり、耳を済ませると合流する音が滝の音に聞こえるときく。その先にこんもりとした森の中に滝尻王子が位置する。滝尻王子は熊野御幸の上皇や女院、随従する公卿たちが垢離をとり、神前で経供養し、御歌会を催した場所であり、また、奥州平泉の藤原秀衡のゆかりの地でもある。

滝尻王子から高原熊野神社まで約六キロの行程。以前JIA和歌山大会に出席された方での見学コースであります。少しいつぱり坂を上ると秀衡夫妻がわが子を岩屋に寝かせたという乳岩・胎内くぐりがあります。傍にそびえる剣ノ山、十丈峠、逢坂峠を越えて近露王子にむかう草むらにおおわれた細い山道は、古道の表情を色濃くのこした路である。杉林に囲まれた山中には、歌声ポイントがあり、声がよくとれる。

古道歩きは歴史をふみしめながら歩く楽しみがある。とくに熊野古道は平安・鎌倉時代から現代に至るまでたくさんの人が行き交い、遠く険しい道のりであるが、荘厳な夕日のすがたや、奥深い原生林の山々がなぜか心を癒してくれる。



高原熊野神社(春日造りの古社)

デザイントーク女流編

女性独得のスタンスから学ぶ

現在の日本は、世界有数の女性建築家大国である。林雅子さん亡き後も長谷川逸子さん、妹島和世さんをはじめ、多くの女性建築家が目覚ましい活躍をしている。女性の社会進出において、必ずしも先進的だとは言えない我が国にあって、この現象は特筆に値するだろう。

その理由として、日本には住宅の設計を建築家の作品として評価する場、メディアが存在していること、その影響もあって、女性建築家の絶対数が多いこと、そして建築を目指す女子学生の数が増加し続けていることが考えられるが、もう一つ、社会に対する女性独特の視点が、硬直した男社会の変革を促す、大きな力になっていることが挙げられる。

今回のデザイントークは「女流編」と銘打って、二人の女性建築家に登場願ったが、この企画の「建築に対する女性独特のスタンスから学ぶ」という意図通りの、意義ある議論の場となった。

【評者】・岡本隆（日建設計）・木原千利（木原千利設計工房）・小島孜（近畿大学）・横川隆一（横川設計室）
・吉羽裕子（I・F・A）・吉村篤一（建築環境研究所）

荒川朱美さん / テクトスタジオ 生前個人墓「自然」

京都造形芸術大学で教鞭もとられている荒川さんの作品は、お墓の設計であった。お墓といっても、家族やイエから切り離し、個人としての墓について考える活動をしているNPO「エンディングを考える市民の会」の呼びかけに応じた、400人のための生前集合墓である。

まずこのような考えを持った人々の集まりと活動組織があり、メンバーの生前契約金（88万円）を基に、既にお墓が完成していることに驚きを覚えた。メンバーの多くが女性で、配偶者や子供がいないという理由だけでなく、嫁ぎ先のお墓に入りたくないという動機も多いとのこと、女性のしたたかな行動力と、そこから生まれる新しいムーブメントの可能性を、改めて印象づけられるプロジェクトであった。

建築的には、「明るく楽しくお墓を語りたい」という会の趣旨にそって、大蓮寺墓地の奥、生玉の森に続く西向き斜面の山ぎわに、小さな広場とガラスの壁を設け、ガラス壁の背後にRC造の屋根をかけている。

この建築の主題となっているのはガラス壁である。インド菩提樹の葉脈の拡大模様をエッチングした19ミリの強化ガラスは、西日を受けて、壁柱の列と床面にその像を映し出し、まさに「光の影」といえる微妙な効果を生み出している。さらに納骨スペースのふたを飾るガラス玉の把手は、光の中に浮かぶ水滴のような効果



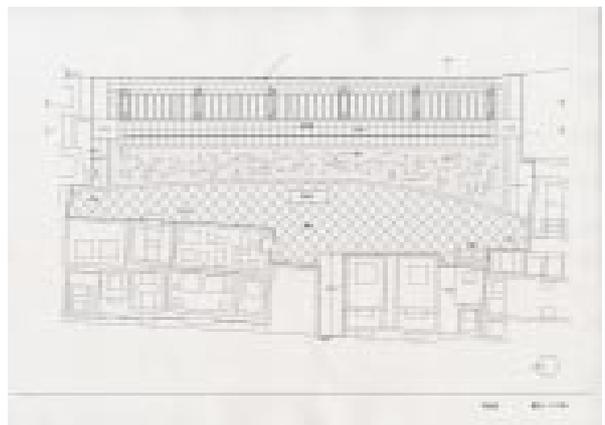
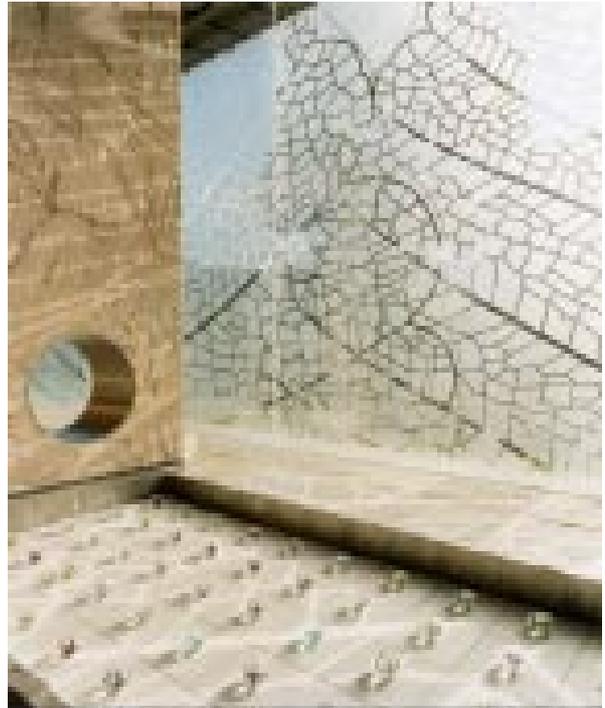
デザイントーク

を加えている。

このように、企画のユニークさに加え、豊かな情感を持つ美しい作品であったが、評者からは、例によって多くの疑問点が提示された。まずお墓でありながら、宗教性はもとより、崇高さや超越性といった、精神に働きかけるものの希薄さが指摘された。「存在を消すことに主眼を置き、モニュメンタリティーは極力排除した」ということであるが、存在を消した後に残る何かに、精神的なものを感じさせることこそが重要で、そのためにはデザインが、やや恣意的に過ぎたようである。 また、どこでお祈り

していいのかははっきりしない、祈る側の気持ちに応えていない、他人が上にくるのはまずいといった、平面計画と関連した指摘がされ、さらに、もっと弱い材料を使って、時間がたてば土に返るといった、時間のファクターを入れたデザインの可能性が提起された。

しかしこの原稿を書きながら改めて考えると、評者たちの指摘は、従来型のお墓観にまだ縛られていたようにも思える。来世を信じていない人々のお墓は、たまたま出会った人達と、ある情感を共有しつつ何となく存在する、それでいいのだという気もしないではない。



デザイントーク

前田由利さん / YURI DESIGN

御影草屋根の家（自邸）

および、こおひい麓（喫茶店）

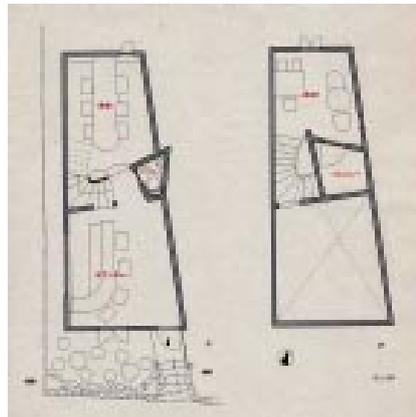
大学を卒業した時に、行きたい事務所がなかったこともあり、就職先に、建設業界の全体像が最もよく分かる、デベロッパーを選んだという前田さんの持参した作品は、自邸と喫茶店の2作であった。

デベロッパーでの経験で、山を削り川を埋め、自然を壊して家をつくる開発という行為に疑問を持ち、神戸の震災で、家がゴミになる瞬間を目撃したことが原点になり、自然にやさしくゴミになりにくい家を目指そう、それは自然素材でできた日本家屋であると気づき、古い建物に学びつつ設計したとのことである。

「新建築」誌が自邸を取材した際、「もっと作品性のあるものを創ってください」と言われ

てしまった、とエピソードを披露し、「デザインには自信がない」と、胸をはって屈託なく話し始めた前田さんの語り口は、今精一杯、建築に向かい合っている自分に全幅の信頼を置いた、おおらかでまっすぐなスタンスを感じさせ、荒川さんとは対照的な形で、女性の強さを印象づけるものであった。

2つの作品は草屋根と土壁という共通性を持っている。特に草屋根については大きな思い入れがあるようで、自邸の後すでに十一例を数える実績から、断熱効果、屋根の上の心地よさ、水やりの楽しさ、わずかな場所の違いで咲く時期が変わる草花のいとしさが、生活者の視点で語られた。また土壁についても、左官職人



デザイントーク

の手のあとや、手の届かない場所に生じたムラ、喫茶店の曲面壁などの、均質でない部分に光が当たった時の魅力が語られた。

しかし作品全体としてはやや大味で、草屋根にしても、風景の一部になりきっておらず、とってつけた印象が拭い難い。にもかかわらず、そのおおらかな魅力は捨て難く、評者達も一緒になって、前田さんの持ち味を生かしながら、作品性を高めていくための方法を模索する展開となった。

空間的レベルで日本的なものを把握すべしとか、ヨーロッパの民家からも学ぶべきとか、内部の手づくりの味を外観にも、といった意見が出されたが、どれも正論ではあるが、決め手としては不足であった。

今改めて考えてみると、私たちの多くは、環境や素材についての主張を持ちながら、それを建前として脇に追いやって、作品性を高めることに没頭している。それに対し、作品性にこだ

わらず、まっすぐ原点に向かい合っているのが、前田さんの魅力かもしれない。周囲の雑音に煩わされず、より強い信念をもって原点に立ち、それを徹底したが故に立ち上がる、自然な作品性を目指してがんばってもらいたい。

(まとめ小島 孜)



住宅部会通信 2005

2月例会見学会「宝塚を歩く」

担当世話人：幸田庄二、豊辺弘也

豊辺弘也
(豊辺建築事務所)

住宅の見学会は難しい。部会員の作品などでも、本人の了解は取れても、施主の承諾が得にくい。1、2人ならともかく、家族が生活している空間に大勢の他人にドヤドヤと入り込まれ、壁を触られたり椅子に座られたり、歓迎される訳がない。

偶々、数年前まで使われていて寄贈を受けた宝塚市がそのままの状態管理している、カリフォルニア大出身の建築家、川崎忍により昭和12年竣工の住宅があった。予備にでもと考えていたところ、世話人会であっさり決められてしまった。市内には98年度JIA新人賞の宮本佳明氏による「ゼンカイ」ハウスがあり、大西副代表のお世話で見学可能となったので、移動経路中の村野作品、宝塚カトリック教会を合わせた三本柱で見学コースを組み立てた。

2月26日(土)13時30分、曇天ながら、暑くも寒くもなく、風もない。

JR宝塚駅前に集まったのは部会員、非部会員ほぼ半々の27名。住宅地の中を最初の目的地、旧・松本邸に向かう。現場では管理者の宝塚中央図書館の倉橋副館長に、我々のために休日を返上して迎えていただく。200m²ほどの木造軸組工法2階建、作品としてそれほど強いインパクトはないが、当時としては希少な21部の実施設計図が揃っている。日米開戦4年前の当時、米国で建築教育を受けた一人の日本人建築家が、どのような思いで仕事に当たったのか、推し量って感慨がある。

駅前に戻り、震災復興した花のみちを通り、支部会員による集合住宅など眺めながら、カトリック教会に向かう。低層戸建住宅群の中に、ひっそりと周囲と同じスケールで収まり、教会らしいランドマーク性を全く主張していない。内部は一変、豊かな空間が広がる。プランは単

純な二等辺三角形ながら、両辺には夫々の環境と機能に見合った細心の仕掛けが施されていて、まさに巨匠の風格。晩年の建築家が、日常の礼拝にたびたび訪れていたと聞く。

最後の目的、今は事務所になっている「ゼンカイ」ハウスを訪れる。当の宮本氏は所用で不在で、用意していただいた詳細なレジメと共に、所員の方が仕事時の内部を詳しく案内してくれる。住宅の評価は内部が2/3で外だけでは判らないといわれるが、これは正にその証明のようなもの。外観だけでは何のことかと思っていたが、中に入って初めて、10年前に設計者が何を考え何をしようとしていたのか、本人の口から直接話が聞けなかったのが残念だが、ある程度は納得できる気がしてくる。

見学を終え退出したところで、行程4キロの見学会は無事に解散となった。モノがモノだけに各人の感想はバラバラ。でも今日の収穫は夫々あったのでは。やはり、住宅の見学会は難しい。



宝塚カトリック教会にて

「旧型住宅」を新築再生

市居 博

保存再生委員会（市居総合計画事務所）



風土の恵み、先達の知恵を活かしつつ近代的な工法も取り入れた昭和初期の住宅。今となっては旧型とも言うべきこの住宅の魅力を超えるものは現れていないような気がします。保存再生ばかりではなく、そのセンスを適正な価格で新築再生することも、伝統文化の継承には欠かせないことではないでしょうか。

手作りの繰返し

工業化住宅は寸法材質の標準化によって品質性能を向上してきました。しかし手作りの工芸的センスを再現するには限界があります。

産業革命以前の一九世紀初、アメリカで展開されたシェーカー教徒による簡素で暖かみのあるデザインは建築、家具、小物にいたるまで自然素材である木やレンガを用い、手作りによるものでした。同形状と決めてつくられた椅子でもよく見ると職人や地域によって細部が違っています。同じことを繰り返す、つまり要領を得ることが生産力につながり、はからずも微妙な個性が出ているのに感心します。一九世紀以降の工業化モダンには及ばないものです。

大正時代から昭和初期の近代和風住宅（私は旧型住宅と呼んでいます）にも同じ雰囲気を感じます。

木組みにおける寸法、仕口、継ぎ手等の標準化が完成され、間取や内法も共通でした。どの家にも縁側、床の間があって無垢材に土壁の造りでした。遊べば各地方に今も残る民家は堂々たる造りです。どれも画一的と感じることはありません。

大戦を境に家づくりの根本が手作業から工業化へと大転換しました。大工や左官の技術が僅かに残る今、私は国産材での墨付け 刻み 建前という建築システムを中心に、職人の手作りの繰返しに適正コストを見い出すことが、保存再生の一環としての仕事であると思います。

建築家CM

そのためには一括請負工事から自由になることが求められました。直営工事となると段取り、金銭授受、安全管理まで施主が責任をとります。私の事務所では建築家によるCM（建設工事管理）委任方式を採用、施主の代理としての業務を既に数年経験してきまし

た。施主自らの家づくり、かつ建築家による設計施工方式です。確かに設計監理と施工管理は異なるものですが、重複する所も大です。要するに優秀な職人、素材の流通、手配段取りに馴染めばよく、住宅規模では責任範囲も目に見え手の届く所にあります。高価と思われた無垢材、窯変瓦や銅板が産直、工場買い等により採用出来ることになりました。実感し難い仮設等の費用も明解に把握できるのです。

建築家CM委任方式は伝統工法の工程の特長と密接に連動しています。要素還元型の近代建築の流れでの家づくりとなると、構造、下地、断熱、配管配線等が露出され、いわば見せたい、見られたい現場ではありません。伝統工法では建方上棟が終わると既に建物のイメージが明らかになります。柱、梁、貫は全て構造材であり保温・調湿材であり意匠材ですから、入居まで常に木の香りに包まれ清々しい現場となります。

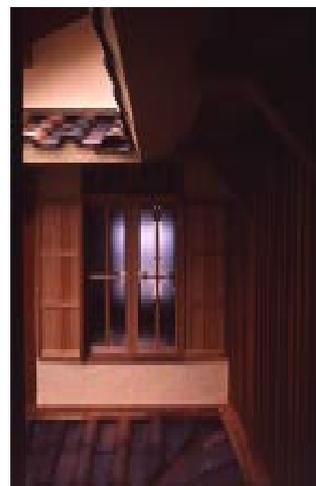
設計者自身が常に現場の段取り、安全、品質、コスト等全般を把握できることは相互の信頼を得る、なよりのメリットと考えています。

存在感のある本物建築

委員会に参加して面白い話を聞くことが出来ました。一昔前の透明ガラスは透かしてみると景色が若干歪んで見えるので、「イビビガラス」と呼ばれているそうです。透明フロートガラス一辺倒の現代では、こういったガラスはむしろ存在感のある貴重なものである。保存再生委員ならではの発言でした。確かに骨董業界では高価に売買されているのです。一般に流通している型板ガラスでも端面を磨いてみるとイビビな雰囲気が出て来ます。メーカーの意図しないところに着目することも必要なのかも知れません。

近代的建築家が改革し創造するだけでは、どうしても抜け落ちるものがある。それこそが存在感に欠かせないものであった、ということが保存再生の主要動機だと思えます。

建築家を取り組む本物の建築づくりはまだまだです。



板雨戸に型ガラス面磨きの木窓にはアルミサッシにはない存在感がある。

都市空間改善の実現へ

**富安秀雄**

(市浦ハウジング&プランニング)

景観法が作られ、都市空間への関心が高まっている。都市住民の多くが、我国の醜悪な都市空間を憂え、その美しい空間への改善を願っている。この分野は、我々都市デザイン委員会の主たる活動分野である。

我々建築家は、こうした都市空間づくりに、直接・間接に関与してきた。この責任の重さを自覚し、都市空間改善に向けて、実効性のある活動を行い、美しい街づくりに貢献しなくてはならない。では具体的に、どんな活動が必要なのか？

まずは新しい、美しい街づくりを実現することである。不景気で具体プロジェクトは減ってはいるものの、それでも方々で進められている。街としての空間を考えれば、単体としての建築が集合しただけでは、全く不十分である。隣接する周辺建築相互の調和や、個性・多様性が求められる。又プロジェクトを包む地域・地区の特性や、環境の反映も必要である。こうした計画実現の為には、他分野の専門家との協同や、場合によっては周辺住民の参加も有効である。美しい街の出現は、非常に大きい影響力があることが、過去の実例が示している。

第2には、既存の街空間の再生である。街のごく一部を改造することで、醜い空間が大巾に改善される場合は多い。この様な部分改善を進めることで、街全体が美しく蘇生されよう。

京都の様な古く伝統のある街では、既に様々なルールが作られ、実行されることで、空間の継承に効果を上げているが、欧州の諸都市にも厳しいルールがある、その美しい景観が守られている例は多い。この様な都市では都市ビジョンがあり、それを実現する方法としてルールが存在する。我国では、上記京都の様な例を除いて、都市空間ビジョンを持つ都市は殆ど無い。我々が混乱した都市空間の改善に挑むことは、その地区ごとの課題を解決し、空間を美しく変える実践であり、それはその都市のビジョン作

成のプロセスでもある。こうした実践の積み重ねによって、住民を含めた都市ビジョンは作られ、それによって、都市空間改善は加速されよう。都市ビジョンは、一律ではない。その都市ごとの特性に応じて作られるもので、又参加する建築家や計画者の個性や、すぐれた環境認識力による所も大きい。

更に第3点として、新設される建築に対して、都市空間の視点からの評価を行うことが大切である。新しい影響力のある建築が計画される際には、それを都市空間の一部として評価し、住民に知らせるべきである。これをジャーナリズムの重要な使命とせねばならない。これによって、一般市民は建築が都市空間形成そのものであることを認識し、又住民としての意見を述べる事が可能になる。現在の醜悪な都市空間が、全国的に拡大している原因の1つには、都市住民の空間への関心の低いことや、情報の不足がある。住民の空間への意識を高めることが、美しい街づくりにには不可欠である。ジャーナリズムが、都市空間への水準の高い情報を常に発信し続けることが求められる。我々もこの方向実現に努力せねばならない。

筆者がかつて住んだ、スエーデンの新聞には、ローカルな紙面が多く、そこには新しいビルの計画が、図入りで報道され、それに対し、多くの市民から意見が紹介される。郊外での高層オフィスビルの計画が、市民の反対の声で、大巾に階数を減して実現したことを、ありありと思い出す。新聞報道による成果である。

以上3点は、今後我々が、美しい街づくりに取り組むに当たっての具体的活動方針と考える。都市デザイン委員会各員の参考となれば幸いである。

リレーエッセイ

船場の町割り - 1

京都の人たちは京の町の構造について皆さんよくご存知で、これが京都の底力なんてことを痛感する。一方、大阪の町については語られることが少ない。そこで、大阪の典型的な町割りの残る船場について一言。大阪の本格的な都市開発は秀吉の大坂城築城に始まり、上町・大坂城・四天王寺を結ぶ平野町一帯に続き、天満・船場の開発が行われたと言われている。船場の町は、町家が表を向ける東西の「通り」（巾員約8m）とあまり表を向けない南北の「筋」（巾員約6m）に囲まれた40間（約80m）四方の街区から構成されている。京都の平安京以来の町割りが60間四方であったため、その中央部の開発が困難であることを踏まえた秀吉の合理性が感じられる。京都においても、秀吉による東西・南北2分等のいわゆる「天正の地割」が行われたエリアは存在する。船場では近代交通の発展により堺筋・御堂筋他が整備されるまでの長い間、大坂城に向かう東西の「通り」がメインストリートであった。船場地区での設計には「船場建築線」の指定が関係してくるが、「通り」と「筋」を両側に2mずつセットバックし、東西12m、南北10mにしようとする指定であり、昭和14年以来行われているものである。（井上 守）

備後町2丁目

引越

JIA事務局は綿業会館の4階に移転しました。もともと建設当初は繊維関係の図書室だった部屋で5階の書庫とつながっていた階段がそのまま残っています。

建築家の提言は？

「住宅基本法」（仮称）は、昭和41年に制定された「住宅建設設計画法」に代わる、新たな国の住宅政策の根幹をなす法律として、来年の通常国会に上程されることが検討されています。そのため、国土交通省の社会資本整備審議会住宅地分科会基本制度部会が「新たな住宅政策に対応した制度的枠組みはいかにあるべきか」報告案を7月7日に公表し、8月12日まで意見募集中で、意見を踏まえ、今秋にも審議会の答申がなされる予定です。これに対して、（社）日本経済団体連合会が6月21日に、（社）住宅生産団体連合会が6月27日にそれぞれ提言を発表、また、日本弁護士連合会も11月の人権擁護大会のテーマが住宅で、各地のプレシンポジウムでは、様々な観点から住宅の安全性等への提言が行われています。建築家も提言をする必要はないのでしょうか。

また、日本人自身や来日する外国人が、日本の歴史や文化の全体像を理解したり、日本文化の特色をより深く理解することができる、「わたしの旅～日本の歴史と文化をたずねて～」プランを文化庁が公募しています。「建築」の良さを知って戴くために、建築家の観点から、「わたしの旅～日本の歴史と文化をたずねて～」プランを検討戴くというのはいかがでしょうか。（A.K）

新入会員紹介

滋賀県	小根田守	建築事務所エヌピィオー
京都府	青井弘之	内井建築設計事務所
京都府	石野嘉彦	スペース グラフィティ
京都府	岡田良子	SpaceClip一級建築士事務所
京都府	奥田順二	奥田計画事務所
京都府	古津真一	翔設計工房
京都府	澤村昌彦	澤村昌彦建築設計事務所
京都府	馬庭 稔	馬庭建築設計事務所
京都府	吉川弥志	吉川弥志設計工房
奈良県	中尾克治	中尾克治建築設計室
奈良県	中元綱一	榎谷設計
奈良県	森田昌司	森田昌司建築空間設計
和歌山県	島桐子	アトリエ空一級建築士事務所
和歌山県	高城浩之	高城浩之建築研究所
和歌山県	山野公嗣	長尾建築設計事務所
兵庫県	石川淳朗	石川淳朗建築設計事務所
兵庫県	野田裕彦	アトリエ野田・建築設計事務所
兵庫県	松尾俊二	松尾設計室
大阪府	赤木 隆	日建設計
大阪府	天野拓夫	天野建築設計工房
大阪府	大西弘幸	I A O 竹田設計
大阪府	岡本健志	I A O 竹田設計
大阪府	沖 裕輔	Y ' s design 建築設計室
大阪府	川瀬晋也	I A O 竹田設計
大阪府	川野達彦	栄和設計事務所
大阪府	久保田裕文	I A O 竹田設計
大阪府	黒田将史	I A O 竹田設計
大阪府	児玉 謙	日建設計
大阪府	小山隆治	小山隆治建築研究所
大阪府	新保勝浩	和田建築技術研究所
大阪府	杉元孝治	有思考設計室
大阪府	高野博彰	I A O 竹田設計
大阪府	玉木鉄矢	玉木建築設計事務所
大阪府	塚原秀典	塚原建築設計室
大阪府	辻 壽一	大阪樟蔭女子大学 学芸学部
大阪府	津田 茂	T-SQUARE DESIGN ASSOCIATES
大阪府	津村泰夫	一級建築士事務所 住環境設計
大阪府	土井一浩	日建設計
大阪府	所 千夏	アトリエCK
大阪府	戸田潤也	戸田潤也建築設計工房

編集後記

昨年度より、本部・支部財政の逼迫を受け、JIA近畿支部機関誌「翔」においても、冊子から電子情報化への合理化を検討してまいりましたが、今回号（2005夏号）より支部HPの一角に電子版「翔」として新たに配信する運びとなりました。昨年度、隔月刊から季刊へと移るに伴い、FAX通信（毎月1日発行）及び、メール・マガジン（毎月中旬発行）をさらに充実させて、タイムリーな情報提供に努力してまいりましたが、経費節減効果もあり、この電子版「翔」は、また隔月版に戻し、年6回の配信と致します。

5月（初夏）、7月（夏）、9月（秋）、11月（冬）、1月（新春）3月（春）の各号の構成となります。

内容的には、これまでの連載記事を中心に、カラー版となりますので読みやすく、また記事がデータとして保存されていきますので、同種のシリーズ記事が画面で連続して読むことができ、より便利になるかと思えます。

今後も、JIAやその他の有用な活動情報、イベント情報を充実して、会員相互の研鑽と、相互理解を高めるといふ機関誌の使命を果たすと共に、より楽しい誌面構成を心がけて参りたいと思えますので、会員諸氏のご支援ご協力をよろしくお願い致します。（広報委員長小南一郎）

新入会員紹介

大阪府	中井浩一	エスプレックス
大阪府	中原賢二	設計処 草庵
大阪府	中間伸和	中間建築設計工房
大阪府	浪瀬朝夫	浪瀬総合計画事務所
大阪府	新田正樹	新田正樹建築空間アトリエ
大阪府	花園園恵	花園設計事務所
大阪府	樋口洋一	I A O 竹田設計
大阪府	藤記 真	日建設計
大阪府	松尾和生	日本設計
大阪府	松村正和	汎設計
大阪府	水野 浩	水野建築設計事務所
大阪府	森山秀二	I A O 竹田設計
大阪府	矢川修宏	I A O 竹田設計
大阪府	柳本重明	Y ' s 建築工房
大阪府	山口隆幸	I A O 竹田設計
大阪府	山崎 勇	U E 企画設計
大阪府	弓場俊彦	I A O 竹田設計

広報委員会

委員長 小南一郎（大阪）
副委員長 小池啓夫（大阪）
委員 足立成美（京都） 一尾晋示（大阪） 井上 守（大阪） 太田恭司（大阪）
木戸口浩之（京都） 瀧川嘉彦（和歌山） 佐々木純一（大阪）
佐藤洋司（大阪） 柴田敬四郎（奈良） 内藤 正（滋賀）
森崎輝行（兵庫） 横関正人（大阪） 大江一夫（住宅部会長）

事務局 穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日 2005年7月29日（夏号）
発行人 出江 寛
発行 社団法人 日本建築家協会近畿支部
〒541-0051
大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374
ホームページ <http://www.jia.or.jp/kinki>
メールアドレス jia@bc.wakwak.com

表紙 第一合同銀行本店 回廊まわり（撮影：上田恭嗣）